經濟
改正 儀禮纂圖集考 附錄
五

雜之巻目録

賦物之事 一オ
和漢の事 一オ
万句千句千百韻 二ウ
百韻の式 二ウ
米字の式 二ウ
七十二候の式 二ウ
易の式 二ウ
源氏の式 二ウ
五十韻の式 三オ
四十四の式 三オ
歌仙の式 三オ
長哥行の式 三オ
短歌行の式 三オ
十八公の式 三オ
首尾の式 三オ
表合の式 三ウ

發句の事 三ウ
第三の事 四オ
月花定座 四ウ
句數並去嫌 五ウ
嫌吉式八ケ條 八ウ 十三
正花の事 十五オ
切字の事 二十三オ
押字の格 二十八ウ
脇句の事 三ウ
四句目の事 四ウ
去嫌大意 六オ
季節の跨物 七オ
指合の事 十オ
戀の詞 十六ウ
発句の格 二十四ウ
抱字の格 二十八ウ

增補 俳諧歳時記栞草 雜之部

江戸 曲亭主人纂輔
藍亭青藍增補

一卷之式 賦物

貞德云連哥ハ五箇十箇ニ
ゴ賦物ハ[illegible]ゴ俳諧ハ百韻ナ
ラバ、俳言ヲ賦ル連哥ハ端作リヲモ俳諧ヲ連哥ト
書ベキ〈六〉〇蕉門ハ賦物ノ沙汰ヲシザルゴ心得ノタメ
ニ大略ヲ記ス、

草 賦物ノ文字耳ニ立字ハ面ヲ變ズ、
賦シ物ノ文字サヘ[illegible]ル文字ヲモワラザレハ五箇ニ
ゴ[illegible]ル事ヲ[illegible]シ発句ニ[illegible]ヲ[illegible]ル文字ヲ[illegible]ル
タトヘバ山櫻ノ発句ニ犬ヲ[illegible]ベ[illegible]ベ犬ハ山ヲモ[illegible]ル
故ニ蜂ヲ魚ニ[illegible]ベシ、餘ハ[illegible]ニ准ズ、一字露顕
二字返音以下百韻ノ俳諧ヲ[illegible]ベ[illegible]ベ〈五〉

賦何衣連哥

年毎ニ[illegible]ヲ[illegible]ル花ハ櫻ノ枕

賦何袋俳諧

あれもまたこれら何しらな世ノ春
うれハ上賦トスルカノ[illegible]ル端作リノ何トシテ字ハ[illegible]ク
のゆうるる物ヲ[illegible]ク句中ノ春トシテ字ヲ呼ヲ[illegible]ル

春袋と取るる物あり始の句ハ花衣と取るべきなり

猿　何

天の川水若くらんかとこの句

是ハ猿若と取るべきなり餘ハ准へもるべし

一字露顕

ちるぞうしろ寝ぬく浮世の杜宇

是ハ句中の寝を音ふ取るべきなり

二字反音

籠で飼ふらねも高し時鳥

是ハ句中のきをとるべきなり

三字中畧

去て来る年のあるもも魚千里

是ハあるもとるふ字の中と畧して網と取るべし

三字上畧

蝶鳥やちりうんとまる花畠

是ハとまるの上と畧して九と取るべし

三字下畧

月ハひとつの影ハ目数のふるあるれ

是ハひとつのつ文字と畧して人と取るべし此外四字上下畧ゆとべハ難波津と上下畧せで庭とまるやうの事又五文字中三字畧ゆとべいつでくらのとふと中三字畧せバ爪とあるとべひ又一字借とふハ白雪ハ山の額の化粧かなこれハ句中のけと毛と聞せるなり

二字除篇

龍門あらで都へのぼると鱈の魚

是ハ鱈とふ字の魚篇と取て雪と仕立べし

他添

鶯やよむ哥毎ふ篇と添て梅とまるべきなり

是ハ毎の字ふ篇と添て梅とまるべきなり

和漢之事

大ぶと俳諧の法と守るべし和漢とハふ五句ゑ以て限りとも但し漢の對ふ至り六句ふ可及事景物草木ホ直敷和漢ふ通用ゑべし百韻ふ一の物ハ和のうとより出さらハ漢ふまぐと異名ふそ用ゑるともわるべし二句の物ハ一つ〻〻万葉の書分ホ用ふべしぞ和漢ふて挙句と漢ふまぐし漢和ふハ和の挙句〻和漢ふハ漢ふ韻字と用ふべし漢和ふハ漢も和も韻〻

一万句 **千句** **十百韻**

十巻ごとにまぜれば千句とのひ、百巻ごとにまぜれば万句とのふ、十百韻と千句の差別八一座と十座のちがひやく去嫌の用捨ある

百韻

十四句 十三句目月 表八句 七句目月 裏十四句 九句目月花 二の表 二の表裏 ふ同し 名残の表 三の表 ふ同し 同裏 八句 七句目花 支考曰

四のひぎきとつゝく、名残の折とゝ名づけ、

表八句 七句目月 裏十二句 七句目月花 二の表 十句目月 二の裏 十二句 初裏 ふ同 三の表 十二句 二の表 ふ同し 三の裏 十二句 二の裏 ふ同し 名残の表 十句 三の表 ふ同し 同裏 八句 七句目花

七十二候

支考曰七十二候と八百韻と三折ふちぶきて、三の折ふ裏と八句とも、もしれば三花五月のて其名八七十二気候をうとゞまつり、

易

表八句 七句目月 裏十句 七句目月花 二の表 十句 十二句目花 名残の表 十一句 二の表 ふ同し 同裏 八句 七句目月 二の裏 十二句 初裏ふ同し 名残の表 十一句 ○青藍云易とは周易六十四卦の数とりことれなり、

米字

源氏

支考曰源氏とい三折ありさるハ哥仙の寝数ゆゑ中頃の名目ありより、其名ハ源氏の六十帖ふまれり、○哥仙三十六句ふ二の折二十四句くゝ六十句とも花月の定座同し、

五十韻

支考曰四十四ハ五十韻の変数りて、二の折の裏と八句とあせるハ其日其夜の時宜と見合せ或ハ縮り或ハ延して、一座の首尾と作るべきこゝめなり、其名ハ四十四とよくしとハ例のつふ俗習ふゞら称せバ祝言のらぐきとゝいふ、

四十四

月 同裏六句 七句目花 ○支考曰哥仙ハ名目の風流也ゝるハ十八番の哥合よりその讃人と哥仙とのゝるふ爰ふハ上下の句と合せて三十六吟の名とふせり、

歌仙

表六句 五句目月 裏十句 七句目月 十二句目花 名残の表 十一句 十五句目月 同裏 八句 七句目花

長哥行

表八句 七句目月 裏十八句 九句目月花 名残の表 十句 十五句目月 同裏 八句 七句目花

短哥行

表四句 月ふ裏八句 初句月 七句花 名残の哥行も短哥行も、求韻の俳諧の為ふと例の支考ゞ新製ありその辨ハ

東花式 及び **和漢文操求韻** の序ふ表

十八公

表十句 九句目月 裏八句 七句目花 ○十八公とハ千歳不変の松と象りて数とゝれり、

首尾

表六句五句目月裏六句五句目花○支考云首尾の吟ハ二座の時宜あり、或ハ長句の諸願と祝し、或ハ歳暮歳旦の賀ことば始終をこゝの心ある意あり、さるハ六々とも八々とも表と裏の首尾と合せて月花二座ハ模様ありて

表八合

八句二句目月

西華集 撰 支考 凡例云、此表ハ神祇わり、教あり、意無常とそらをぶく名所をのゝ人の名をのゝハ一巻の始終をこゝ心ある心あり

湖東問答 去来云、去秋芭蕉翁ハ旅寐して、卯七と表合あり、我ハ諸て日凡表合ホの俳諸ハ寻常の式と替るべし、表の内ハ一巻の姿にて、去嫌あるもの多ハ用ひまじき事なり、一段面白うるべしと答ぬ、二子ゐて、弱ハ聞ゆるとも、

發句

諸抄云一座の巻頭なれバ宗匠貴人老人の外あるべうもぞ句の体伸くと和らく、詞やさしうハ心をのゝうたゝ云ゝ切字の道理ハ切字の条ハ注も

脇句

発句の時節と違へもその餘情とのんとうべし、発句神歌憲無常時宜述懐もれバ脇句も同くその内らひあるべし、発句雑もあるハ脇も雑あり、諸抄云韻とてゐそうて留る事あきゝ

あるもとゝ初心のもるとゝハあらぬと、云くいまゝ

ゐそうその故と明さぬ青蓋桜ある、脇ハ哥の下の句ハ

して上の姿とうけ結ぶを正格とも（但ハ発句脇句限る長句ハ意と残ハ短句ハ意と結ハ格ハ）さるとも未練ハ

脇句の体と失ハ、初心のもるとゝハ留る時ハ意残りて

むたゝとこの故ともらぬとも文字ハて留る時ハ大ハ

意切て脇句の体と失ハ、字留ハ

べしてふもとゝ留る例とのハ

よそれん初時雨 芭蕉 又山茶花と病をみて由之

の日霜月や鶴の行ゐあらひ〳〵荷兮

ゐのゝ名ハ芭蕉

春の草 荷兮 打ちこ蝶の夢さめ芭蕉

諸抄云、文高く脇句ハ轉ぬとゝ句ハ

ハ才三の本意ハ第三ハて留ハ

ゐそ云ゝ云ゝ

発句の姿ハ轉ぬ〳〵めんゝ

とも三の格ともあゝ其故ともらぬ

ゐゝ下と結ぶとき大ゝと意残ゝ

續虚栗

たび人と我名

冬

續野

ゐのゝ名ハ

第三

才三の体と失ハ

故にこそ月との留にてもよしとの心 但しこゝに月の手示波をし留ることも意き
れざるは第三の格にとかく定まることもなくてふものもあるにつき
まじき意を残して下句に及ぶこともあれハこの桐のるを
いふ道理となるにつく句作ハ意にまかせて 冬の日 三才
に花鎌倉の霜に咲くへつて 杜國 同上 三才 捜檜山家の体
を木の葉降 芭蕉 朝顔の巻 三才 非落しさこめに月ある
出ぬれり 芭蕉 猿蓑 三才 雲雀鳴小田に土も月にあれや
珍しく定まるところてふもあることのへる作例如此、中にも月ハ出
ぬれりとよまれたる翁の句ハ、発句に似たれ
ども意の切ぬを以第三の体となれり准へしまるべし

四句目

諸説に云 ありなりまでのかろき留にふしぐらあるら
かるべし云々 ここまでも其故を明さず、青藍按ずるに意
を残し四句目に及ぶをと第三の体として此の意をうけ結
ぶを四句目の格ともせ故に作意と求めずかやさこそはしても

月花定座の心得

去来云 花に定座なしやと 先師芭蕉いひ給ふ。当流中古
ことを用ひに花を引上るに二品あり。一ハ一座に貴人
き人あるぞ、其人に花を望むとき其人の句前に至り春

季を出して花を望むあり。是を呼出しの花といふ。又ひと
つハ貴人功者の人他に譲るべき人もなき時呼出しを
待ず花を作る。又両吟の時互に二本づつの句なれば
辞退に及ばず引上て作る。これを故なれば呼出しハ
呼出す者の過ちとして花なくの罰ありといへども 蓍盤
云 月花ハ一巻の飾りにして定まりたる座あるにハあらず、附
合の辞義よりつりくて後れたる時賞翫の月花と折端
へハこびたる故 折端前の高句として定座とす 例ハ真
故を知るときハ月花の座とあらむとはまた一巻の変化
ハ自在ならん 但し月ハ折端へこびせる例あれどもこれハ前に
月の障りありて止事を得されざる例とみえたり。
あり花ハこびせる例としてみえたし、

去嫌大意

貞享式 云 去
嫌とハ天象地形より草木鳥獣も器財食服こと目
にさらし耳にふるくものハ見ることに遠意あるべければ
これへ人の制せずとも、我こし用捨あるべきなり。云
是を我門に一理万通といへ 柳 俳諧の式ハ甚だ無
言抄に濫觴し、貞徳の御傘にひろまりしかれども猶
連哥の家にふるい、應安の新式を鑄形とするなり

例に姿情の行ちがひありてよくべハ袖あるゝに洞遠き
に還り天に空雲に雲てもの也といへバ二句去の式なりされ
ども蕉門一流の姿のよしといふハ誰が二句にて附べからん
古式に牡丹ハ一座一句の物故に俳にハ廿日草深見草ホの
異名などと分ちあるべしこれらもよびおなじく音と訓ハ
かハれども同じ一座の百韻にて同じ物の二ツ出さらんハ
賓主作者の不機轉なるべしされバ牡丹のけやれきも
蹈皮の牡丹とのいハ或ハ牡丹餅などハ常にハ植物の牡丹に
あらざれバ折を去面をかへて五句も三句もまずべし是
ホと異名などハ異体なるゆへ古式今式の差別餘ハ准て
知るべし

此ホ流布の俳式ハ御今より抄出しからる去嫌ひのあらまし姿情の行ちがひありて一かたならぬことさ式と云ハ只貞享式によりて知るべし

句數并去嫌

表八句に嫌ふ物

神釈恋無常 述懐懐旧名所同字病体人名ホ嫌ふべし
と諸抄にみえたり青藍云病体人名嫌ふといふもさる事なれども
初懐紙 三才 雪村が柳さへ行棹さして 冬の日 十三 月影
に利休が家を尋ふのけ 句塞 三才 西行が軍法たのもし小
夜ふけてなどの作例あり按ずるに風雅に富る古人の名、

表のうちにもうてミゑびハ聞ゆるバからずことならし
しあるる事なるべし、権兵衛八兵衛のけやれ俗称と難ふ有るべし、瘧野 狂 填挂つ
の人おそる事なりとのるも云くの病体ありて申ても源氏物語
などの併ふくハみやびなるバかりしてあるべに古人の活用銘

春秋（はるあき） 三句より五句までつゞく二句去て八啓ても春秋ハ
景物多きゆゑなり○春と春秋と秋五句去ゝ
夏冬（なつふゆ） 一句より三句までつゞく三句より多くハ甘八夏
冬ハ景物少くなればなり○夏と夏冬と冬五
句去
神祇（じんぎ） 一句にてとゞまるもあり三句より多くハせず○神祇と神祇三句去あつこと
なり
釈教（しやくけう） 神祇に同じ
述懐無常（しゆつくわいむじやう） 一句にてもとむるなからんとも述懐と無常と引合せて八三句ハあるなり無常むかうハ三句つゞけず述懐も同じ○述懐と述懐無常と無常三句去く
恋（こひ） 二句より五句までつゞく一句まハ捨て○恋と恋三句去也今五句去と是後人の私
山類（さんるい） 一句にてもしからずとも三句をつゞく山類と山類三句去なり
水辺（すいへん） 山類に同じ
人倫（じんりん） 同じ

雑

二句もつづく。○人倫と人倫、二句去もあり。**居所**一句もあり、三句もつづく。○居所と居所、二句去あり。**旅体**上ふ同じ、**夜分**上ふ同じ、**生類**二句もつづく。○虫と獣、虫と鳥の如く、変じそい二句去あり。虫と虫、獣と獣、鳥と鳥と三句去もあり、**植物**二句もあり。多木と木、草と草、三句去もあり。○木と草と変じて二句去あり、**名所**、**国の名**二句もつづく。○名所と名所、国の名と名所と、変じて三句去、**衣類**二句もつづく。○衣類と衣類、三句去もあり、**降物**二句もあり。多くハつづけど雪雨ふるこゝハ、**聳物**二句もつづく。○降物と降物、二句去、**天象**上ふ同じ、**食類**二句もつづく。○食類と食類、三句去、飲食と食類、三句去、**時分**夕時分もあり。夕時分と朝時分、打越をきらふ、二句とハつづけど○火体と火体三句去之、**火体**、**風体**上ふ同じ、**支体**三句去、

去し、**三句去**車ふ馬角。頃ふ間。折。生類ふ赤水。案山子。鳥子。雨ふ露。手ふ袂。襟。鳴ふ誠。月ふ朝日。二日の日の字。月ふ日星。今ふけふ。たゞふ枝。拳ふ遑。あゝも一理。万遍と以て除ハ准ずし、**三句去**同字。月ふ月次の月。正花ふ草木の花。竹ふ竹田。風ふ木の字。除准ずし、**五句去**同季。霞。田。竹。月。涙。夢。枕。煙。船。路**七句去**櫻ふ花。匂ひふ香。園ふ宴の字。神ふ神楽。餘ハ准ずし、**季節の跨物**

載入、**出替**、**彼岸**、**挙入**後の彼岸。逆の挙入と断ず。

もとも秋季ふつれてハ秋。載入出替も同じ、**鷺**、**鴨**、**目白鳥**、**頬白**、**瑠璃鳥**、**鷓鴣**、**鶏**春秋の季ふつゞこゝハ、暮末の二字と断らず、其時其季とふもじし、**椋鳥**、**鶺鴒**、**菊戴**、**豆週**し、

山雀、日雀、四十雀　この類ハ秋のことゝ春のことゝ用ふべし、駒鳥　春ハ鶯と用ふべし、秋ハ鶯と用ふべし、裕、鯉　秋の一字と断らず秋よりつゞくハ秋なり、掛乙　年の暮と定むれど今の例なり、盆のことも　春ハ摘菜の遊びなり、秋ハ茸つゞくなり、野遊　狩の意なり、春秋の二季ふつれなり、鶯飼　鶯毎ハ桃の節供ふつゝまりて菊の節供し、鶴飼　供ふ終りなれどもとゞ鶴毎ふ春の気ふきふき故ふ夏と秋との二季ふつゞくるの例ふ次の論ならん、節供　何の節供と断らずとも春夏秋の三季ふ、鮎、簗　簗ふハ上下の字と断て鮎ふつれなり、鮎ハ若しくハ落ちたる鐵るとらいて春秋の差別あれど今の省法よりとの断ふ及ばず、祭、鷹　四季ふ渡る物ハ祭と鷹の類なれど其季の名目とて四季の差別とるせるなり

俳諧ハ多用あれバ其名目と断ふ及ばず其分の季ふつゞまて決して四季ふ用ふべし　以上貞享式より抄出ま、

古法可有取捨事

柳、櫻、鶯、蛍、杜若、芭蕉、蝸牛、鶺鴒　此十品ハ象物の数量あり古抄ハ此類と音訓ふ替異名ふ叶でハ三ツ　四ツとも免しくれど今の俳諧の式目ふ一座ふ只一定のゝ古今の取捨とハ此謂なり、右ハ十品の名目を挙て万物万象の凡例とふせるなり、

去嫌可有斟酌事

父、母、男、女　此四品ハ人倫の凡例なり、主、誰、身、獨、媒　此類ハ二句づゝ去べきなり、僧、寺　此二品ハ古式此五品ハ人倫の尊あり人倫と定て指合とらるゝ、人倫ふ非ず、

居所ハ非ゞとのゝ古今式ハ指合と繰へきなり、親王・皇女・天童・天女・帝・御門・仙洞・新院・鬼・佛

此十品ハ古式ハ色々の説あれども人倫ハ二句ハ去べきなり、御門ハ居所ハ三句去べきなり、

若菜・郭公・松虫・水仙・水鶏・三日月・尾上

此七品ハ會意の名目ハ二ツハ有べくもとおり、會意ハ二字三字の意を會めてその名と作る故ハ字と造るなる六書の一名ハ、雪・雨・古式ハ此二品ハ雪四ツ・雨二ツとあれども、名類ハ雨と四ツあれ共し、虫・魚・馬・車・飯・餅・茶・酒

此八品ハ日用の物あれバ一座ハ二句ッ有べ、松ハ子の日・月ハ、更科・花ハ、

芳野、

此三品ハ連哥の沙汰ハ論ハし、鐘ハ、鉄將酒ハ爪木ハ、妻、歎ハ、木ハ篠ハ佐々羅・翠簾の菖ハ、水邊、山伏ハ山類夜分、

此七品ハ古式の嫌ハ物あれど今式ハこの沙汰ハ、閼伽・筵・火・轉寝・眠の字・起の字・虫・砧

此八品と古式ハ夜分と定められども今式ハ夜分の意ハて指合と繰ゑ、冠ハ、烏帽子・綿ハ、木綿・夕立ハ、雲・雨ハ、笠・鷹ハ、狩

此五品ハ古式ハ附句と嫌へ〳〵總てハ古今の違あり、彌生・師走

此二品ハ古式ハも異名の月を

附〻ことゞ打殺と嫌ふ
ハこの〻古今の通式なり

指合可有分別事

△おそとあり△
頃とあり△ふとあり△てとあり 此四品ハ
古式ハ大事とあれど、今式ハ子細あり、△老△親子 此二品と古式ハ逆懐と成せり、
今式のハ分別
なべき哀を、△鳴子△網△花鳥の繪花
ふ、櫻△楓ふ紅葉 古式ハ鳴子ハ稲と字る故ハ
植物ハ二句去とをいふる意
のそこびふ、ふ、ハ分別ハ及ぶまじ、生類ハ二句去べ
し、網ハ魚鳥と二句去の例あり、或ハ草木鳥獣の絵ハ
其季〻と持あり、生類植物ハ嫌ふまじとやふべく
雑とふ、ハ論なくらん季を持ハ二句ハ去ぎるべし、これら
ハ絵の月、喩の花の例あり、凡雑の賞詠とあせる花ゆ
ちの二品を櫻と花ハ面どちりて輕く楓と紅葉ハ折と

嫌ひて重し、何とて二品の差別あるを、花ハ三春の艶こい
ひ、紅葉ハ三秋の色といひて、櫻と楓、其体あり、花ゆ紅
葉ハ其用あり、この故ハ花ハ櫻ふあしゆ、櫻ふあらぬ
ふもあ〻ゆ、ハ我門の正花論あるとゆ、爰ふ論ハ櫻
も楓と花と紅葉ふハ面どちりて、只一ツ
あるべきふや、異体ハ例の數とさゞめゞ、

千句有一物之事

△鬼△虎△龍△女 此四品ハ連俳の差別あり、新式の一座一句ふ
野ふ九五十余名あれども、多くハ連哥の用ふ
して、俳諧ふハ不用あり、鬼味噌とゆひ
龍門とふハ異体ハ例の數とさゞめゞ、

花鳥有二物之事

△燕△鶯△菊△千鳥 此七品ハ古式ふ
一座一句の物ふ
ゆとゞ、花鳥の二品ハ四花八月の賞詠ふ数ひ〻一
座ふ二句づ〻有べきことあり、花鳥の名ハ代〻ふ考べし、△柳△櫻△鷹

△冬牡丹　△冬椿　△冬梅　△紅梅　△
緋桃　△梅櫻の紅葉　△山吹　△郭公

此八品ハ花鳥の中ゆゑ只一句ゆゑ二句いあるべき物の九例あり此段の詮用ハ二句あるべき異体ハ只一ツゆゑ二句あるべきに同体ハ二とあせり、
二句一意の用をあらべきなり、

日用可輕物之事

△昔　△曉　△庭
△垣　△袖　△襟　△湯　△汁　△文　△使

此十品ハ古式ハ一ツ二ツとあれど、新とゐん替ていハ四もあるべし、

△照　△曇　△泣
△笑　△植　△苅　△眠　△覚　△起　△居　此十

品ハ日用ハ多用あれバ面と替ていハ七ツも八ツもあるべし、

△目　△鼻　△耳
△口　△手　△足　此六品ハ支体の躰ゆゑ嘉の用多けれ共、所と替て四ツ

かりも
有べし

尤可不審掟之事

△老　△福神　△
親子　元中古の式目と論ずるハ第一連俳の用と
不用ゆゑ[illegible]連奇ハ艶詞のゆゑと
学び、又二ハ意の理窟とゆゑ[illegible]て滑稽ハ談笑の和
とゆゑ[illegible]ゆゑ、今の俳諧の扱ひとハ雲泥のちがひある
事あり、これ中ゆゑ不審もなき沙汰ハ老とハ連ゆゑ
表八句ハ樂べと福の神ハ嫌ゆゑ[illegible]ハ彼ハ理
窟ゆゑ[illegible]命の字とのて述懐ゆゑ[illegible]親子と
つゞけ〳〵ハ述懐ゆゑ[illegible]これハ何故ゆゑ[illegible]△
稲妻　△電光　△烏鵲の橋　△龍　△民
の竈　古式ハ稲妻電光と天象ハ樂ゆゑ[illegible]烏
鵲の橋ハ生類ゆゑ[illegible]龍と生類ハ嫌

むもとゝも武の竈ハ居所ふわらぎとゝろくるとゞへ不審のまゝふ用ふべきやゝ但しハ今式の道理ふまのうまて嫌ふべき

△吉日柳　△蓋　△櫻人　古式ハ青柳訊ハ春まりて植物ふわつやゝ

をゝも蓋訊ハ秋ふもあるゝを生類ふとあるゝを冬まり櫻人訊ハ春の季と持て植物ハ三句ごとり人倫まも二句さるまり同三品の訊物ハ三色のちがひあるゝきふゝひ三別の道理ありとも道ふ一貫の日あのらん今式まうバ去嫌ハ一例さらん

△泪の露　△泪の雨　△青楓　△擡鳥

泪の露ハ降物ふりて泪の雨ハ降物まあらもとといへゝ御今の細密も不審まり△青楓と秋といふる察をゝふ姿情のゝうひまらん青の字ハをゝく秋の姿ふあらぎと楓ハまゝく紅葉の体ふるゝとゝや若楓の下どゝもゝゝ若楓ハ夏まりとのひて青楓もハ紅ゝらるゝ両所ふ両注のちがひあゝゝふらを不審の不審とゝやいゝく擡鳥と雑ゝらんまどゝ擡鳥ハ勿論ふて菱喰も豆まゝゝゝもどの実と好める名まらんまハ論まゝく秋とら書ゝ

曽不及論物之事

△雪ふ霰　△椿ふ花　△蓮ふ實

御今ハ雪ハ霰ハ附句ゝ嫌ハもゝ椿ハ雑まり花と結びゝを春まゝ蓮の実ハ夏まり蓮ハ花とまふ実を結ぶ物まりとゝ以ゝるゝとゝ今式ふハ曽て論まゝ

右古式をもゝく蕉門一流の確論をつゝ蕉翁の授記ゝと貞享式ふ載ゝり菱ふハ其大暑と記まゝのゝ本書ふ柔ゝゝ議論あれハ往てゝるゝゝこの外の去嫌ハ御今　苧環　通俗志　等ふゆゝゝ

暑

も、

指合

貞享式ゝ合とりふいてふとゝもの同字ゝ

そもゝてとでとの清濁ハとゝろをゝひとき耳ふゝらぬゆふあり数字も送字も旧式より軽ゝゝとゝハ一盃ハ山ひとつのゝとき詞路の拍子ハ耳ふゝいちゆハ二日以下ハ夫ゝてとゝひゝゝもゝ余ハ一理万通と以て准へ知るべゝ但ゝ初心のゝまりふゝとゝ古

式ふのげしるし左ふ抜出す、

い

いづく　二ッ〇折と替べし　いつち　とらへ　五句

物ことを、あふ　あぞ　いろ　いを　いとこ　いろ　いろ　二句去る

いつしの　一句の物、俳ハ二句

いろ　いろ　ひ、ひのぐせん　一ッ〇上の五文字ハかく字ふり、以上

いふせん　留ふかく字ふり、以上

二ッの内今一句の内ハ、いふ、いろ　三句去

は

いな

し　上句下句いづれまでも今日　七句去

一ッくさ　三句もとべし、むうと　むし、

とむ　濁音二句去、

ふ

ふとあると　上句のふ留ハ三句去、下句のふとあ

ハ一座一句の物ことを且あらひありとゝ入り青蓝抜きる

ふ上句の意をうけ結ふを下句の格ともそうとゝらひ

あくふ　ふどう　ふるもれで意残りて下句

の格をあさも故ふあくひありとゝふ、ふどあり

ふ　ふとゝふ詞きゝふ、

よ　折合ハ　ふて　ふとあると　苗ふ限　ふど二

句去ふり、

ぬ

ぬとぬ　とそんぬとそうんぬハ二句去、

但し折合　とそんぬと不のぬハきゝふど、

ときゝふ、ぬるとぬる　二句去、ぬらんとぬら

ん　七句去ふりぬらんとも　二句去ふり、

ふ三句もを　ふ、

る

るくのさ　ぐひふり、るとあり　青蓝云紐鏡よりくる五段の

るくと、七段のつる、八五段

のるると、三十九段のうるゝ　ふ、八五段

を打越ふ白きらんざるふや、炭俵　前句ふ

ら貫ゝる　附　僧都のかとくまづ文とのる　又打越

ふ嫌ふ例ハ同巻ふ終夜尼の持病と押へるこん

ふくどう残る名月　初ア小菜掛下世

敷てゝる　この外作例ハわ〳〵暑之、

二句去ふり残

らんの類ゝ、

か

かさね字　俗ニ送字ふ

ふ　ぜらく

るどくの類ふり、附てハ　ふるどくの　打越ハ嫌

ふゝ送字の句ふ送字の句と附る　之一折ふ一ケ所

づくハまづ〳〵 **か** 形 発句の外よ願のゞふとゝく今二句多くハせを、もるもるあり、ふうねゞいろゝ
もるゞ かとゞ 二句 かうこゝろの去く かう 二句去く、
あり、かとゞ 二句 かうこゝろの去く かう 二句去く、
知或ハゆゞこさよもゝ
さよの類、二句去あり、

れ れ 下和の れ二句去ちのり

よ よ せよ よの下

ぞ ぞゝ 二句去く、

つ つゝ こゝあり 折とのゝ三ッを

もゞ〳〵つゝゝと
てハ二句去く、

な なりふ ふりふ 二句去く、 ふりふ

ある、あれ、あれや、ふらし、ならん、

皆附句と嫌ふ、 ありふ成 成の字の意あれハ附句も打越もきらいを、 な

て ふつて 並ひとゝも打越ゝも嫌いを 深川集花盛り御室の路の人通ゝ麥と菜種乃

野ハ錦あり 作例多し、 あれや、なゝし、ふらん

七句去あり、二座三ッとわる多し、 何の字、 幾の字 附句と嫌ふ 打越を

きらい
えもを、 ふゞら 二句去 ふ 物ふ ふり入そのふかに 又つきせゝふのふり

皆二句去あり、

ら らゝしとふ らゝ、らんとら

ん 二句去 らん、ふん等 のゝりとる一字でねを

ア〳〵やらめバ附て 留りぶハ二句去ちゝと

もらゝしゝゝを、

う うち 打霞打つの の類二句去

や や 折合と嫌ふ疑 いのやハ二句去

ま まゝ 折どきら嫌ふ ふゝねゞ二句去を

け けらし、けき 皆二句去ちゝ

けつゝ 二句去ちゝ 青藍去

けりとゝりのア文字打越と嫌ふを

を縁の下まそ和日あり 生鮫あゝる浦の春ふ此村

の廣きふ醫者 ちゞけゝホの

のをゝうゝ けし ちゞけゝホの けせ咲け

詞面をきらふ、 け の下知二句

去
こ こそ留り 一座一句千句ならバ三句あるべし、 て て
とめとまり 上句のて留三句去あり、下句のてどめハ
どめふ同じく文字の条ふ注しあり
さ さ の類、二句去あり、 つれなき恋しさ
の類二句去あり、深き浅き
のき、附てもくるしからず、 き しき きこ ちらくちりき
めでたきうれしき 色めくめ
めく 類五ツあり、
面を嫌
へべし、めるめぬ めるとまり 二句去あり 一座三句とも とまりのふ
志 過去のしと過去のし 二句去あり、現在のし同じ
過去のしと現在のしと付てもくるしからず、
志とまり 清濁かはりでも二句去あり句
の腰ふ折合てもことと嫌ふ、 志
て留り 九の物之、 志き 恋しきこひしきの
類、二句去あるべし、 も
もれし留り 下句の内一句と二句めく、
出るらふ折を替以上三ツ せ
十四

せんといふ詞ふ、するといふ詞 二句去あり するとするも、
せんとせん おもはじ、 す すとず ずらもときぞ
の類二句去之、 別吟
別吟といふこと也 難波よ波、大和よ大紫ふ筑
紫のことくハ是と同字別吟といふ附句を嫌ふ
御本 折合 折合といふこと也下の中ふ花を見んとて山ふ入
あらふの句ふそ留の上の句を附そ又前句辻上句ふ
秋の夜の明るまて月をみてからふ句ふ消ふられて
あらぬ、腰の折合ふて文字をもへつくまでとの義あり、
ての字ふ限らず文字ふ文字え役字皆同前なり
まてすてあらくれてふえあらさるて留ふ嫌ふ丸大も
捨て果てあらくてかく
附るるハきらふなり

正花之事

花ハ往古ハ三本ありしを 勅許あ
つまて宗祇そじめて名残の花あり
名残の花を添て百韻ふ四ツとなりへり、芭蕉翁云
我家の正花論よハ花ハ櫻ふあらず、櫻よあらざる事
雑

ゆとわらぎ 宇陀法師 新六著 花と櫻と思ふ作者有り唐詩の花ハ牡丹あり吾朝詩哥の花ハ櫻あり連俳の花ハ櫻ゆとあるぞ牡丹ともあり花ハ貴賤の愛名と任ぜざるべ花ハ櫻付る事あり何そ花の句櫻ふらむ花ハ櫻つくる事あり茶の出花藍の出花正花くるぐるしと先師芭蕉申されき稚蓑の俳諸名残の花ハ櫻あり云れを見誤て正花ハ櫻をるべ人もあるけり櫻正花ハあるぞ初心もてることまつぐ口傳あり云云

春の正花

花ハ杜鵑 古式夏之部 貞享式 今按ずるハ漢家の詩ハ杜鵑とも蜀魂とも杜宇とも暮春の景物なれ幸ハ其例と假てるく暮春の用とあるべきなり本よりも鶯の巣ハ結ぶ決心の花 春のはの部花心の条ハ注を詞の部ハ花字のそいさして春と定むべし云云 花ハ正花ハあるぞまつぐ春のはの部ハ花字のそいさるこれ正花あり故ハ省くたづぬ見るべし

夏の正花

若葉の花 貞享式 今按ずるも月花ハ凡雜ハ一卷の飾あるべ跨ぎくる物ハ加減〻四季を自由ハ配ふべ月ハ若葉ハ花と結びてハ決〻て夏と定むべし云云

残る花 夏の部の部注を、秋の部ハ注〻〻、餘花 夏のよの部注を、

正花

花火 夜分あり、花相撲 植物ハ花燈あり、花籠 夜分あり植物ハ二句去あり、

冬の正花

歸花、餅花 一書ハ雜の花ハ花前ハ至て夏冬の季出くる時

雜の正花

花を附る用とあるべしされど次の附句ハ春季とも るくるハ例ハ花と重じくる蕉門の捌あり云云○ 青藍云蕉翁のくそくられるいふハ及ぶべ諸門人の俳諸ハ雜の正花をえぶべ好むまぐき事ハ作花 植物ハ二句去あり、花塗 漆の事あり、花やい 植物ハ非ず、花うゐらぎ 鞘鮫ハ模様あるし茶の花香 食類あり植物ハ嫌

そなまじ、今いふ、そながく小鼓よまり植物にあらず、花子は狂言
奥花あり、花形物にあらず、
人倫あり、燈火の花植物ふあらもふ
植物ふ、花紅葉青藍云 玉葉集 貫之が梅
わくるぶ、津桂の花わこちといふる其
角の句を秋季につまく正花とせる例あるべし、
句体ようく、春のうちもこつまめ〳〵し、

戀の詞

貞享式 我家ふハ詞とのて意とせぶ、
ま〳〵て文字ふこそらぶハ古抄ふ女の
一字より、嫁ことを娘ことを野老傾城の名目とも、
當句ふ意の姿情ふきことき、例の詞と意とせぶ、此
ふ他門より意と一句ふて捨るといふ方外の沙
汰あるよ〳〵意ハ陰陽の道理ふまぶハ三句より五句ハ
時ふもこのひて意と一句ふて捨まじき故なり云云○
支考云意の一条ハ今式の大事ふて意ハ一句ふく
捨まじき陰陽の理のごとといひてその外ハ未然ふ定
めがたふ其故いかんとふまぶ、詞の意ハ字ふあれど、

心の意ハ句ふある故なりその時その句ふむるそさまを、
句情ハ兼てさそぶ紀ぐしたく、ハ此頃の附句ふ普請
場の飯も一度ふ起そろひ常の先ふそつもと手拭、
とらく附句ハ普請場の墨所ふ只今膳と居んこそそこ
らの埃と掃ねうもふおくより起出る人もあまぶハ折釘
の手拭と常ふのナく及ひ越まさ〳〵出〳〵る大工木挽
の立さとぎて物の世話〳〵きさふふふを三句目の作者
愛をもうく打越のもこひと轉ぜんと起情の附方を
案〳〵て思へ花おもひ出ふありのつれふくてとハ傍輩中の
もの〳〵ねふ床の下ふる率也川のいさもく〳〵ぬ顔こそ
あへあらめあらぬ色ハ前句の作者ふいうて意の心ふ
なまぶ、後の眼力ふさてとと意の姿情と見附ぶれ
バ彼と我〳〵の二句とありて意ハ決〳〵て二句とこの之〳〵し、
○青藍云蕉門ハ意の詞ふ定てあるまふあくぶ心の
ものつの八言葉のもさらきふて意ふ〳〵ぬものも意句ふ
もらもふもを、作者のもさらきことをもれぶ心ふ意の
詞ふあづこて句作をぶるるぶ許六云晋子ふ句ふ物さ
〳〵ふ狂ハ男のもこのまそと云ハ意の詞一字ふあ〳〵まま

さゝ踏込る意の句あり、道年俳書にて意の詞を摘
ぬくふ、その人の胸中せまきこゝろ、○意の詞ハ
意のこゝろ、多くあつまるこゝろ、彼ふゆづり〳〵てゝハ
あらまし〳〵と記し、ちさこう注譯をくはゝ、初心の便とし、

戀 逢意、別る意、忍ぶ意、恨む意、待意、待
る意、思ふ意、思ふる意、恋る意、絶る恋、絶て久し
き意、憂意、契る恋、あうる恋、物思ふ、うき
意の奴、意衣、意草、恋の病ひ、**思** 思ひ、思ひ川、
深き思ひ、思ひの山、思ひの烟り、斤思ひ、相思ひ、
思ひの情、うらみ、思ふ、思ひの淵、思ひ草、思ひ花、
思ひ、**情** 深き情、薄情、情
ある、とゝる、つゝき情、**ふげの情** 情ゝゝ
等閑の情ゝ、**泪** 泪川、泪の淵、涙の海、涙の雨、
ひゝる心あり、袖の涙、袖の露、袖の海、涙の瀧、
袖の雨、○涙の川も海も、ゝらゝこの山、恨
泪をゝらゝくゝふあり、**恨** うらゝこの山、恨
の海、ゝらゝこの、**夢** 句
ふよう恋 体
よあふぐ、**夢の通路** 夢のうちふ
通ふ、**夢のたゞち**

雅語譯解夢の
まくらぢ下六、**聟入、嫁入、婚礼** 待女郎、貝
桶、
新枕、若後家、若衆 寺若衆、男色美
町若衆 少
年、小、**念者** 男色ゝ、二の谷嫩軍記 六弥太屋敷の
段宝蔵発見の段 行
々性、是の隠居ゝ、御子息の六弥太ゝ、
同年ゝらゝの親子の中、中 略 親ごゝ
の中ゝ大事ふゝ、旦那の念者でいある
まいゝ、ゝ、ゝ、ゝ、親分ゝ
ゝらゝ、下 略 玉海集 附 句ゝ
ゝ、**別の袖、逢夜** 逢ゝ夜、**密言、兼**
隈光 逢て年ゝ
言、私言、文 玉章、艶書、 文ゝ
千話、
袖引、尻つゝる、門ふゝう、辻ふゝう、
前ゝう 世ゝ ゝ人住ゝ

契　ちぎりの末、おぐ〜契、伊達、身ぐ〜なし、二世の契、うきちぎり

獨寝、人目　人目の関、目くらせ、神祈　人目を忍ぶ

憂別、うきと人、色　色このむ、色ふ遠ふ　たづね、

名ふ〜り　うき名、りく〜名、とり名、あぐ〜名、悪ぶ名、　みだれ

心　あどころ、待　待宵、まち人、まちぶる、鏡　十寸鏡、占方、辻占、夕暮辻ふ出　姿見鏡、占　口占、灰占、夕卦とふ　て初めて来る

人の詞をもて思ふ人の吉凶を占ふと云ふ、形見、出家落　髪落を

坊主おとし、哥比丘尼　賈董集東海道名所記万治仰本巻の

二云いつの頃ゥ、比丘尼の伊勢熊野ふまうで〜行をつと

ゥ〜ふこの者子ゥれ伊勢熊野ふまゐる、此故ふ熊野

比丘尼と名〜其中ふ声よ〜哥をうたひゥる見のあり

てゥ〜うて勧進〜ゥ〜ゥ中略絵ときをもゥ〜ゥと哥を

かんそゥ〜ゥと云ふ青藍接をゥふ色と賣し

もゥ〜〜故ふ意の詞ゥいぐこせるゥるべし、いひ

ちつけ、肌ぬる〜、媒、恪氣、口子、

二心、水くきき　つめくき心　縁、うきえふし、諸白髪、

蓮の上の契、父ゥ子、結ぶの神、

懸想文賣　春のけの部ふ注も、水祝ひ　同みの部ふ注も、

常陸帯　同ひあ部ふ注も、筑摩鍋　夏のつの部ふ注も、

雑喉寝　冬のねの部ふ大原の雑喉寝〜て出〜注も、願ほどき

き、子をおろも、仇くらへ　実情ふ薄〜

してだごひ〜恨う恨〜られて事あるこうせる云、垣間見物のひとまうい

虫の印 つくること むしの印とハ守宮の印のことあるべし云〜守宮の血と女の

時ふぬくおけば、一期消うせもとり〜春心と動せ、怨ち消うせ〜博物志ふこうんこと人守宮ハ蝘蜓なり、石

龍子と名く、守宮の名ハ秦の始皇帝宮人の私ならん事とおのひてその朱と飼ひて宮人ふ点せ、故

ふ守宮の名 ありしいふ、轉合中戀心 つくるせこと 媒あり て中あて取ちら

ハ意こうそまう いくり、薄中、心中、やとあ、惚ろ〜、

ぬつこ心、後よび 後妻と うえもろこと いふ、

和名抄 後妻、和名空波奈利、うえもろ打 うはまり打とらふ ハ妻と離別して

後の妻をむかへるふそのもろことふよろこ〜前の妻やと

〜き女ことをてのこ〜某の日某の時うはまり打ふ

ぬく〜ぬきよ〜といひのり某の日ふ至れて前妻をとど

めと〜そもとぐふ女どもおめ〜くもあひやうのものを

もちて後の妻のうくふへ行臺所より入ることを打まうる

後の妻のうくふてもをそ〜きかとのこ〜むきそ打を

〜と用意もさそ〜ぐひふあらをふいきと前妻後妻

の媒せ〜ものこ妻と待女郎ふありし女と双方の中ふ

へあつひあごめそうつ〜もろうぐぐひふ男とまうる

事ハせざり〜〜とあん 古記 宝物集 ホホ後妻打の

ことそそれハ古くまうあり〜事あり 玉海集 附浅

茅生ふるもあり町のちまりて 貞徳 ○醒睡笑云永

禄元亀のころまでも有

〜ふやあんと云云、とやとこ、きと

ぬく 暁起 つくること ぬぐとうく〜の衣裳と取

替る心より意の別と衣々とのふやぎ、

下紐、身とあのもと、措切 髪切 股

突、尻目づひ、思ひさまう〜 つくるせこと

年来深く

ふものめさる中の人の中言ふ、又思ひの外ふ仇ふる夜あり〳〵その思ひのまゝとのふ、偽り、

難面、うとましく、徒背きくの中、

[日くせこと] 年ごろふかく思ひる中の互ひ心中ふ恨むことの出来て解さるまゝ何事も背きくふるも、

祓さむ、嫉妬艶、物の怪、

意の恨ふことりあせる生霊死霊といふ、

後めたき [雑語譯解後] 目ひかることり、

ウチシナヘキガユルセヌといへ意ふり云く、

枕ふらぶる 長枕、二つ枕、うらと枕、手枕、

近まさらと 近くてこれば遠目ふり

近おと うきもりてこゆるまゝ

つと 近まさりの うきもり、

仇めく

古ぶる 見捨ら

忘らるゝ、親さそる中 [日くせこと] 此詞二義わりたく親と

ちのらひても我おもふものとそひぐ〳〵ものふ一義、又ふの〳〵思ひうそ世ども親の制し避てあそもぬと云一義、

二道かくる、 蜘のあとそふひ [日本紀] わかせこが来べき宵ふりさぐふの蜘の濡衣 あさこ名のうつと おとそふひるとてふる〳〵も、

むう〳〵筑前守ふりそる人の娘、継母の讒言ふ、或書云その〳〵ぬ蛍の濡衣と借取て、娘が朝寐をうし

即所ふあきて〳〵その衣と娘が盗めるようにいつせもの

ふ〳〵そそるめる哥 ぬぎそうる其〳〵むうのぬれ衣

長きあさごの衣〳〵ふりそう云 名ふようて説と設

けこふ

駒 人ふ憑らるゝ人の乗る駒いつまでくとのゆること

俊頼集 ぬら〻袖でゆうき我駒のつまぐくとびふ身そ〳〵くけも

さらば垣 山城の朱雀ふわり遊女此所迄客と送る故ふ名く、

錦木 むう〳〵陸奥ふくおりふ女の門ふ立る木

あり、その木ハ一尺ばかりあり、五色ふ彩りてうつくしきもの
やるふ錦木とらふとぞ、詞花集 かやひるふ立初る
錦木の千束ふてたちうつもの 白氏文、起請
ぐ、毘房 この外古奇なやしい 男女ふひふ神文
してちぎるなり かさねる沓 女のみをうごもる時ふハ穿くる
沓のおのづから重 肉陣 肉屏 天室遺事 楊國
ありて脱ぎとぞ、 忠久月常ふ嫉妬
の肥大なる者を前ふ行列て風を遮りむ蓋
人の氣を藉て相暖む故ふこれを肉陣とふ 後
宮 禁闕中美人の在所をふ 美人の名、義人と畫、
漢書 王嬙字ハ昭君漢の元帝の宮人也 西京
雑記 元帝後宮既ふ多し常ふ見ることを得ず乃ち
画工をして形を畫せしむ畫を業として善ものを
諸宮人皆画工ふ賂を、獨王昭君ハ、遠ふ見ることを
えず、匈奴朝ふ入て美人を求む閼氏ふせんとも愛ふ
於て上畫と業して昭君を以て行かしむ去ふ及んで

召て貌をうるふ後宮永一ときて帝ことを悔じ怨
嬢已ふ定る常信を外國ふ重んぜ、故ふまこと人を
更ず、乃ち其事を鞫案して画工を市ふ
棄つ、漢書琴操ふの說迭ふ異し、 返魂
香 李夫人ハ李延年ふ妹武帝の夫人ふ返魂
香のこと、世人のもるところふ書き、
空焼 薫物 留仏羅、袖の移り香、 化粧、
ふせ籠、枕香炉、うつり香、
紅粉、白粉、爪紅、 的、 黛、眉掃、
鉄鬢、
匂ひ袋、不二額、 丸額、 齋男、
妹許ゆく、女のもとへ紅 紅絹 白陀羅尼 當の
うつりと墨の氷
永といふる発句ふ香の朝日ふ紅絹の水ぐりとの今
文考ぶ服あり、これ恋句ふ句体ふ多し
夫 せふハ東國の方言 夫、婦 つまとしく男女相互
ふ夫をこしてその人、 めふつまと称せり

女房 女房、男房かと宮人の称ふり今立女、夫たちの妻をよびく女房ともいふ、

外婦房 寝所なり閨中ハ宮中うふ門なり、**花街** 遊里、乳寺の里、室の津、神崎、江口、大義、祇園町、**主月楼** 妓門、浅妻船、吉原の里、嶋原の里、新町の里、祠門、浮身宿、同船、**遊女** うかれ女、傀儡女、遊君、あそび妓家、揚屋、辻君、女郎、売れの君、雛妓、宿出女、夜発、もれ女、一夜妻、**傾城** 傾国、傾城、傾国ハ元美人の称、誤て遊女とす、

開巻一笑了 繁妓の如雅なる者、**鴇老** 妓楼の老女、**紋日** 水あげ、**もち付煙草、つけざし** 飲ける酒と飲て

れを付ざ

しとつ、**比翼蓙、忍び編笠** 吉原の里へかゝる人者、泥町今の田町なりの茶屋にて編笠をとりてゝぶり

一事ハ世人のゐる所あれバいとゞ種彦云ハ編笠

とりもどしなれる家ゐりぶりゆくと、**暁金** 元禄の頃

手編笠まゝ手前編笠ともいふ、

江戸吉原の花街中後朝雨ふるときハ今と異ふ、

ゐるとき暁今ゝとゝ八 五元集 郭公あつまき本をのゝ世

けゝし、淫蕩なりて仁義礼智忠信孝悌

其角 **亡八** の八ッと亡ふかもてゝ名つく、**女**

樂 舞姫、白拍子、**伽やらう** 江戸にて飛鳥頭、大坂にて伽やらう又ゐんとよ

と云、**野郎** 色子、**陰間** 男色をひさくものゐり、**飛子** 旅茶間も、

神媒 正字通 路史、女媧、正姓、姥戒婚同是、曰神媒、

切字 貞享式 むゝ〜より切字の事ハ十八字の品

ありなく和哥ゐも連哥ゐとゝ、その沙汰あれど

例の何ゐもゐとゝの故とあるゝゐハ童部の心経ゐむ

ゐゝゐし自己ふ分別ゐるゝとゝあゝとゝまゝ中古の俳

諧ゐゐゐゐゐゐの名目あれどをゝく連哥の用ふゐち

へまゝゝし今の俳諧の姿中ゝ同体別用のゝゝゐゐゐ

こゝ〳〵そもく切字の用るゝハ物ふ對して差別の義ありてそれハ是ゝと埒とこゝけて物と二ツふきる故ふ始あり終ありて二句一章の発句ことをあれり九切字の品ゝらふハ或ハ一字の働あるやの字よの字の類ことゝハ或ハ餘韻の助字とあせるしの字むの字の類とゝハ其外ふ何誰とうこうハ哉来と治定をるを迷ハ惜ア動けハ静さらハ物こ相對の道理ありふ〳〵ハ発句の切とのこゝのひて字を定むるふハ及ゞゞ耶と

うこゞん馬ゝゝ哉来と治定されたとハ道理とゝ〳〵ぬ人もおのつゝら発句のさ多とあれ〳〵ゝ我家ふハ心切ゝいひ中の切といハ挾拔切とゝ名あり〳〵ゝ

ふ心詞をゝひのゝせハ惟ある切字ハあり〳〵○青藍云切字ハ心を切〳〵句意と首尾させんがゝあれハ

へ定とる切字ふゝこと心切首尾ゝこのひとるハ発句

あり但し心をきゝらゞ下句ふ及ゞゞと平句の格を例ふ何故ゝ

その埒とあるときハ句作ふ自在の働有べし

中の切

猫の恋ゝゝ時ゝゝゝの朧月　芭蕉

たゝく〳〵出てゝゝゝゝ月の雲

心の切

ひと〳〵らゞ雪見ゝろゝふ所まて

ゝゝて死ぬけしきハ蝉の声

挾拔切

世を旅ふ代りく小田の行戻り

人ふ家を買せて我ハ年忘

二字切

君火ゝけゝゝき物ゝせん雪九け

三字切

子供らよ昼顔咲ぬ瓜むく

二段切

夕ゝも朝ゝゝゝゝ瓜の花

空鮭も空也の痩も寒の内

三段切

梅若菜まり子の宿のとろ汁

とまり

青くそゝ有へき物と唐〳〵迄

米ゝゝ友と今宵の月の客

わまり

桐の木ふ鶏鳴ゝる塀の内

柚の花よ昔ゝのそん料理の風

玄処切

春ゝゝ〳〵きとゝのゝふ月と梅

ゝゝくと日ハつれゝくも秋の風

大きのし

辛崎の松ハ花より朧にて。

行春をあふみの人とおしみける。

無名の切

名月の花かと見えて綿畠

一家みな杖ふしら髪の墓参

中の切も挨拶も二段切も三段切もとまへらるゝも、おほま
ぎれと無名の切とまでゝ心切なれど、名目ざまざまある
ハ初学の為よ
わきまふべし、

口合のや　是やこの煤りそまゝならぬ古格子　芭蕉

切や　朝がほや昼ハ鎖おろす門の垣　仝

捨や　露とくとく心みに浮世すゝがばや　仝

中のや　旅ねしてみしや浮世の煤はらひ　仝

ものや　白魚や黒き目をあく法の網　仝

すゝのや　むざんやな甲の下のきりぎりす　仝

こしのや　庭掃て出るや寺にちる柳　仝

名所のや　難波津や田螺のふたも冬篭　仝

疑のや　梅白しきのふや寉をぬすまれし

しあき人の小袖も今や土用干

此や疑のや也、上ふ疑のやあるときハ、下ふへさとあきき
嬉しき　恋しきこのき文字、ありし　ミしの過去のし文
字、又ハふのぬ或ハたる　ぬるづるなどの詞とをく結
ふあり、又くすつふむるんのくぐひハもも唯ぞ
のや何の両用となるあり、かくの如く結び詞のあ
らざまバ、語格とくのそぞ、但し味のやハ結び詞い
らぬ

あり、のれ、のと　あやひ抄　うおうも全く同

心の詞あり、中むらしより六
せうく疑をうもとよくく味どうれとよむ習となれ
あがれハ味る意うもハ三笠の山ふいでし月ふこても
と疑ふ
意あり、もがれ、てしがれ　願ひのうあたらふ　黄菊あらきく
その外の名ハふて　過去のし　いひし、見し、
ものがれ　嵐雪　さあしぶるのき
ぐひふて此し　未来のし　類ふそきらるあり、ここしきくしの
ハ切主なあり、
ふのぬ　きうぬ、いえぬ、など、ふふうよ　畢ぬ
ふとふのなとの切主なあり、

雑

きらぬ、きくめる、思ひぬ、おもひめる、

つ　つハ大かたタゞしのふとるもじと付ることぬハ切るゝなり、里語にあらわれり、猿蓑　いねく下知の詞　見よ、と人わいそがしの暮　路通

下知の詞　せよ、まて、いけ、など人に下知する知くあるといふ皆切るなり、

か　疑ひのかな、切るなり、

ゆ　聞せる、見せるなどいふべきを聞せ、見せと切し、

よ　下知にあらざるよし　猿蓑　鵙のゐる野中の杭よ

十月嵐雪

ぞ　奥の細道　蛤の二見へわかれ行く秋ぞ　芭蕉、炭俵　八巻ととゝのへぞ若衆ぞ大根引　野坂、此類のぞ也、

ぞ　寒けれど二人寝る夜ぞこのもしき　芭蕉　猿蓑　ねんこの薮ふく風そあつかりし　野童、この類のぞハ疑のやの余ふのつる詞にて結ぶなれハ語格とくの流、

に何そ　あハ切の意なり○盃に泥におとしそ　村雙　芭蕉

こそ　これも下にけせてねへめれ或ハしかの結び詞のあらざれバ語格とくのなぞ○白魚に價あるてこそ恨なれ　芭蕉

まづらんむ餅そくねね桃の花　全○又一例　利雪、

な　猿蓑　初さくらまたと追々に咲ても

ん　あゆひ抄　世に願ひのならんとおひつけされし直ぞと詠らつる詞なりとちるぞちらるんとつる詞とおもふべし　云々、

ん　同上　今より後をそうりこよしそこしこまをそそる心なり云々

らん　同上　其心いづまをとらへるわのとかるうをとるこそとりをわりせてよめり、里言ごとに多

らし　同上　らんよりハ慥に見定めなどく心のかちるぬ理すまなり、サウナとのる里言にあれり、芳野紀行　箱根越人もあるらし今朝の雪　芭蕉、

けらし　けの字のそへたるて意上にかぬし、

まし　あゆひ抄　世の中にさくらハなかりせバ春のこゝろハのどけからましと里言にのりせだ、そり、蕉門の俳諧ハ俗談平話を専門とされハまし とりる詞いと稀なり、続虚栗　附句　思ふまじ物美人ハましモ花の隅

まゞ　行まじく、為まじきことと其角、いへとまりと切るゝ

めつと

[あやひ抄] その大むひとおもへうてつゝみて心あり、里言のオモムキチヤ、ヤウスヂヤもあどのふさ似くう [古今] あつさ川わみちくれてあぐるハキウスめイノこゝろ[illegible]ば錦中やさえまひ、な [あやひ抄] ナヲと入れかいる詞さぐら思ひあもまりてハひとこゝろもいふ爲

[曠野] 二日ふもぬこのりハせじふ花の春 芭蕉 を

[炭俵] いそぐきさ春と雀のうきさ袴 酒堂 この類のを切るゝ、へし [あやひ抄] 其いきをひを

るるふくありてよきをどり とえろうさごあていふ詞あゝと、ゝ なりハて ありのつぶ まれる詞まり、なり、あり つゝひあれこゝる切字まれバ注ニ不及、かし

[あやひ抄] あつらふる心のゝるふこと ゝりとも人とうぐのそゝろうし、かし [同上里言ふ] ノといふ心とゝして落着をる詞あり〳〵ゝゝし ふゝひとゝふぐき春ハ春でいあとゝを詞ふ、やハ これい理と我よりハ決せもしてきく人の心ふ決定を発せさもる詞ゝらハやハ

同し類の詞ゝもとの落着かハハナンデハナイと決定しやハハナンデハアルマイと落着をゝこれ自然とやとかとの差別ゝてゝくらゝる夏ゝうゝ、

[古今] 春の夜の闇ハあやなし梅の花色こそみえね香やハうゝる」うゝれハせぬ いこふ、いづ、

と心ゝうゝく落着をるまり、

いづこ、いづら、いづく、何、いく、誰、

さぐど、いそ まゝつひやうこゝぶ

みてきゝまり、不動言の切

青藍云切字まゝこも句の下ハ動ゝぬ詞と居ゝ時ハ大ゝこ心きゝまり「さぬくの過ゝとなりふ手の暮」「攔干ふ夜ちる花の立姿」「有明のまゝうくふさゝ遅櫻」「めけゝらふゝひて死ぬる秋の蟬」

先哲の作例

うくの如し、

[神祇の格] 尊きふゝれ却〳〵合ぬ御迹宮 芭蕉

猶ゝゝ花ふ明ゆ〳〵神の顔 〃

釈教の格

涅槃会や數手合する數珠の音、
灌仏の日ふ生れあふ鹿の子うば、

戀の格

紅梅やうぬ恋つくる　玉藻、

無常の格

もとそ死ぬ〜きぐるる蝉の声、
竜祭くつも焼場のくりうれ、
秋風ふとれてうめ〜き柔の杖、

追善の格

當帰よりう哀ハ塚の菫草、

述懐の格

ふるくも瞬の緒あるく年の暮、
父母のあきうふこゆ〜雉の声、

羈旅の格

ひ〜ら脱てう〜ろふぬ更衣、
年くれぬ笠きて草鞋ぬぐら、

餞別の格

鮎の子の白魚送る別うれ、
此心推せよ花ふ五器一具、

名所の格

九月雨ふるれぬ物や瀬田の橋、
松島七千ふとれて夏の海、

即興の格

景清も花見の座ふハ七兵衛、
むーきけ秩父とのくん角力取、

昼寝の格

粽やふくと手ふをこむ額髪、
降をし竹植る日ハ蓑と笠、

昼讃の格

山吹や宇治の焙炉の白ふ時、
ゆるしの俳諧くんぬる胡蝶、

畳字の格

奈良七重七堂伽藍八重櫻、
昼顔ふひらぬせうめ床の山、

時宜の格

梅白しきのふ雨と降ま神〜、
やとり木ま猶やとり木や梅の花、

時宜とハ其時ふ瞑て其人ま對して情と述るとい〜ふ前の一章ハ野さらしの紀行ま三井秋風が山家を訪ふとい〜ふ端書あり〜くあるく〜と林和靖ま比〜くるる時宜ふり後の一章ハ曠野集ふ出て細代民部ゝ息ふあひてといふる端書あり句意ハ菱日記ふこれハ其父弘氏の主此道の風雅ふ名ある故ゆゑ〜云〜、

賀の格

先祝へ梅と心の冬こもり、

雜の格

ちちふくば杖突坂と落馬哉、
あさとるとふ誰松島ぞうこ哉、

貞享式 今按ずるに名所より雜の発句と八一句ふ其所の名と出し其風景の情とうつしもろまこ賣事とねもごんとせぐ姿情ハうまうびおくゆるるまじ云々

押字

何の木の花ともわかぬ匂ひかな

上ふ何ともなく下ふるまとハ結びとこのまぞ、
ちるをとゝめ下ふく上の何を押へまと、

抱字

夕顔や秋ハいろ〳〵の瓢かな

上よやとあり下ようまとハ結びとこのまぞさる
を秋ハのハ文字ふて上のやう〳〵と抱こう、

増補歳時記栞草雜之部終

書籍賣捌問屋

土州高知 栗尾民藏
仝 近藤烏吉
仝 山中專助
仝 澤本駒吉
仝 井上俊三
阿州徳島 里源精二
仝 黒崎助
仝 世渡谷文吉
筑前福岡 林斧助
仝 山岸登
仝 博多 高田芳太郎
雲州松江 園荒右久郎
播州姫路 山水田喜郎
仝 伊藤豊二郎
仝加古川 前野長平
仝明石 藥師寺和七郎
和州八木 田中卯三郎
大阪書林 藤田善市郎
梅原亀七 藥師寺善平版